

1. 科 目 名 国語総合（1年次）

教科書『国語総合 古典編』東京書籍 平成二十八年三月十日検定済
教科書は今年度使用のもの。ただし、授業内容は新学習指導要領に即して
デザインした。

2. 単 元 名 季節を独自の感覚で捉え、短文を書いてみよう。

3. 育成する資質・能力 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を
深め、我が国の言語文化について自分の考えを持つこと。

【読むこと オ】

4. 単元の目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
古典の世界に親しむ ために、作品や文章の 歴史的・文化的背景な どを理解することが できる。 【我が国の言語文化 に関する事項 イ】	作品の内容や解釈を踏まえ、 自分のものの見方、感じ方、 考え方を深め、我が国の言語 文化について自分の考えを持 つことができる。 【読むこと オ】	古典の世界に親しむために、作 者の感じ方について理解を深 め、自分のものの見方、感じ方 を見直そうとする。

5. 具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
古典の世界に親しむ ために、文章の文化的 背景などを理解して いる。	作品の内容や解釈を踏まえ、 自分のものの見方、感じ方 を見直し、ものごとの捉え方 を広げている。	古典の世界に親しみ、自分のも のの見方、感じ方を見直し、新 たな表現の可能性を追求しよう としている。

6. 使用教材：『枕草子』『五月ばかりなどに山里に歩く』

7. 本単元における言語活動

作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動【読むこと イ】

* 2年次に学習予定の『古典探究』には言語活動例として

古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動【思考力、判断力、表現力等 ウ】

とある。言語活動としてはそれを先取りする意味もあるが、型にはめることにより難易度を下げて、1年次で活動できるものとなるよう配慮した。

8. 「五月ばかりなどに山里に歩く」の学習指導案（全4時間）

授業内容の概要

本文を正確に読解し、書かれている対象を自分に引き付けて捉え、自分のものごとの捉え方を見直したうえでオリジナル作品を創作する。

	評価規準	評価方法	
第一次	<p>古典の世界に親しむために、正確な現代語訳をし、そのうえで文章の文化的背景などを理解している。【知識・技能】</p> <p>作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方を見直し、ものごとの捉え方を広げている。【思考・判断・表現】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・部分訳の口頭発表 ・参考論文の読み取りをもとにした現代語訳の記述の確認 ・グループワークの成果発表 ・作者の感性の働き方についての口頭発表 	
	この時間の目標	主な学習活動	指導上の留意点
1時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・前半を正確に現代語訳する ・和歌を下敷きにした表現を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面を理解する ・現代語訳する ・「草葉も……」の一文を引き歌と比べながら理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「五月」の季節感、「山里」の意味を考えさせる ・「歩く」「つれなし」などの古語の意味を正確に捉えさせる ・「草葉も……」の一文の構造を正確に理解させる ・参考論文を読ませる
2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・後半を正確に現代語訳する ・グループワークにより助詞「の」の用法に習熟する。 ・表現技法や感覚の働かせ方を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代語訳する ・グループワークにより助詞「の」の用法に習熟する ・時節と場所の関わりを考える ・作者の感性の働き方を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代語訳は配布プリントも参照させる。 ・グループワークを取り入れ、助詞「の」の用法に習熟させる ・一例ずつ用法を確認し、解説したものを理解させる ・時節と場所がふさわしい組み合わせになっていることを捉えさせる ・それぞれの場面がどのような感覚をもとに描写されているかを考えさせる ・時間があれば、自分なりのふさわしい時節と場所の組み合わせを考えさせる

第二次	評価規準	評価方法	
	<p>作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方を見直し、ものごとの捉え方を広げている。【思考・判断・表現】</p> <p>古典の世界に親しみ、自分のものの見方、感じ方を見直し、新たな表現の可能性を追求している。【主体的に学習に取り組む態度】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・記述された作品 ・生徒同士の批評 ・話し合いへの参加のしかた（観察） ・自作を、最優秀作を参考に改良しているかを記述で確認 	
3時間目	この時間の目標	主な学習活動	指導上の留意点
	<ul style="list-style-type: none"> ・古文作文を行う ・既習の語彙や助動詞等を適切に運用する ・作成した作品の評価を行う ・他者の作品を評価する 	<ul style="list-style-type: none"> ・定型に則った古文作文を書く ・ペアで発表し、どちらがよいかを話し合う ・4人グループで良かった2人が発表し、どちらがよいかを話し合う ・8人グループで同様の作業を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇月ばかりなどに××に歩く」を定型とする ・既習古語や既習文法事項をそのまま使ってもよい ・どのような点がよかったのかははっきりさせる ・選ばれた人の作文をグループで改良する
4時間目	・最優秀作を選ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントで配布された作品から最優秀作を選ぶ ・投票、集計する ・最優秀作を決定し、作者はコメントする ・最優秀作を参考にしながら、自分の作品を改良する 	<ul style="list-style-type: none"> ・8人グループで選ばれたものを1枚のプリントにまとめる ・作者名を伏せて提示する
	・自分の作品を改良する		

ことばがつかなく自然と人間——『枕草子』の山里

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたるに、上はつれなくて、草生ひ茂りたるを、長々と延まに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むにはしりあがりたる、いとをかし。

左右にある垣にあらぬもの枝などの、車の屋形などにさし入るを、急ぎてとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはつれたるこそ、いとくちをしけれ。蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪のまはりたるに、近うちかかへたるも、をかし。
〔前日本古典文学会本 二〇六段〕

『枕草子』の中でも、よく知られた章段の一つであろう。山里に出かけた折の、作者の注意深い観察と洗練な感覚がうかがわれる一段である。前半の「上はつれなくて」と「下はえならざりける水」の箇所には、

蘆根はようきは上こそつれなれ下はえならず思ふ心
〔途還集 巻四 八九三 よみ人知らず〕

という歌がふまえられている。この歌の用いられ方を緒として、引用の問題を考えてみよう。

まず作者の前には、一面の草の青が水にも映った、静謐な景が広がっている。「上はつれなくて」の「つれなし」は、何でもなげな様子をして、という意味であるが、すぐには意味がとれない。この「上」に対する「下」の「えならず」は、普通ではない、という意味であるが、その字義どおりの意味だけでは、もうこは文脈がとれなくなるであろう。詠注・解説が分かれていて、ここで、読み手は、先の和歌を思い浮かべることによって、コンテクトを構成しなくてはならない。

「蘆根はよ」の歌、初句は、蘆の根が延びているの意、次の「うき」は沼地である。全体の意味は、蘆の生えた沼地は、表面こそ浅く水が見えているもの、下には水分を蓄えた泥が深く、しかも蘆の根がしっかり広がっている。その風景ながらに、うわべは何でもない様子をしていても、心の中では深く狂おしくあなたのことを思っているのですよ、という歌である。

表面と内心との対比は、恋歌としては、常套的な読みぶりである。表現の上からは、当該の『枕草子』の節がこれをままたえいと見えてまがいないだろう。多くの注釈がこの引歌を指摘するものの、「引歌とするか」といった、ためらいがちな指摘も多い。それは、当該箇所が、「蘆根はよ」の歌の恋の意味までは持ち込んでいないからであろうが、表現の一致の度合いから見れば、引歌と認めるべきであろう。問題は、恋の意味を持ち込まずに、単に「上」と「下」との対比だけを利用した、文飾程度の引き方なのか、それとも、もつと別の読み方ができるのか、ということである。

はじめに、「つれなく」と「えならず」の箇所であるが、引歌を参照しながら解釈すると、うわべの「つれなし」と対照的に「えならず」という内面を持っている、という歌のコンテクトからは、山里の「つれなし」も、下に水があると「えならず」も見せず、といった意味合いにならう。そして、「えならず」は、直後に「深くはあらねど」という留保をつけているので、「上」の「つれなし」さらには、想像できないような過つた状態、すなわち、水が意外なほど溢えられている、ということであろう。

さらに、元の歌とこの文章とを比べてみよう。元歌は、うわべと内面との対比を、蘆の根が張った泥地に喩えている。「つれなし」と装束その面でのどうにも処理したい、わたかまる思いがこの歌の主眼である。ところが、『枕草子』では、そのような恋の情念はきれいに捨棄されている。表現が一致しているわりには、内容の面では共通する点

が少ないのである。そうすると、わざわざ元の歌と一致する表現を使う必要がないようにも思われるが、おそらくそれはあるまい。

ここでは、元歌の沼地の映像に基づく重苦しい恋のイメージを、初夏の晴れやかな山里における散策の風景へと転じている。さらに、元歌のやや単純なうわべと内面との対比に対して、「上」の「つれなし」に対する「下」の「えならず」の発見という具合に、動的な関係、自然の変貌への驚きが語られている。それは、自然の中に人間が関与することによって起こる変化、すなわち、自然と人間の瞬間の接点による意外な事態の生起点であった。「えならず」の「つれなし」は、意外な事実を発見した折に用いられることばであり、この場合、びつたりした表現である。「上」と「下」との対比を利用しながら、それが引き起こす驚きへと文脈を展開させてゆく点で、これは単なる文飾ではないと見てよいであろう。

このように見ると、あたためて最初の「上はつれなくて」に新たな感情を読みとることが可能になってくる。作者が一行が来るまでは、まだ自然は「つれなく」、すなわち作者たちとは何の関係もないまま、距離を持ってそこに存在していた。この風景は、人間が関与しない限り、そのままの姿で持続的に存在しつづけるであろう。ところが、牛車の一行が進み、人が足踏み入れるやいなや、水は「はしりあがり」、すなわち、びつたりした表現という反応を見せる。この、人間と自然との新鮮な関わりによる、自然の新たな姿の開示、それを、引歌の「上はつれなく」「えならず」は、絶妙の表現力をもって支えているのである。

その流石と、この段は、全体として、跳ね上がる水、取りそこねた枝、回ってくる蘆、という三つの自然がただ並列しているだけなのではなく、前半は、自然の中に入ってゆく人間に思いがけない、自然の姿が開示される、という形での、導入部をなしているといえる。そこに恋の思いを秘めた歌を引歌としつつ、巧みに自然の秘められた姿が見えてくる、という仕組みになっているのであろう。説明をすると、ただとどろいてしまおう、このような自然と人間との関係を、引用表現は一瞬のうちに作り上げてしまおうのである。

『日本文学の表現機構』所収

第二章 引用 『枕草子』の山里 高田祐彦 岩波書店 二〇一四年

資料 3

『枕草子』

「五月ばかりなどに山里に歩く」

○現代語訳

五月の頃などに山里を(牛車で)散策するのは、とても気持ちがいい。草の葉も水も一面にたいそう青々として見えているところに、表面はふつうに、草が生い茂っているとしか見えなところを、ずつと、まっすぐに進んで行くと、下にはなんとも言えずきれいな水が、深くはないけれども(あり)、供人が歩くにつれて、(その水が)跳ね上がったのは、とても感動的だ。

(通り道の)左右にある垣根にある、何かの枝などが、車の部屋などの中にさつと入って来るのを、急いで手に取って折ろうとするうちに、ぱつと通り過ぎてはずれて行ってしまうのは、たいへん残念だ。蓮で、車輪に押しつぶされたものが、車輪が回るにつれて、(近くに来て)さつとおうのもなかなか粋だ。

○用言

歩く カ四体 をかし シク終 青く ク用 見えわたり ラ四用
つれなく ク用 生ひ茂り ラ四用 行け カ四已 なら ラ四末 深く ク用
あら ラ変末 歩む マ四体 走り上がり ラ四用 をかし シク終
ある ラ変体 ある ラ変体 さし入る ラ四体 急ぎ ガ四用
とらへ ハ下二用 折ら ラ四末 する サ変体 過ぎ ガ上二用
はづれ ラ下二用 口惜しけれ シク已 押しひしが ラ四末 回り ラ四用
近う ク用 (ウ音便) うちかかり ラ四用 をかし シク終

○助動詞

たる 存体 たる 存体 ざり 打用 ける 過体 ね 打已 たる 完体
む 意終 たる 完体 れ 受用 たり 完用 ける 過体 たる 完体
たる 存体

参考 『枕草子』 枕草子 下 橋本 治 河出書房新社 一九八七年

五月ぐらいなんかに山里をドライブするの、すつごい素敵。草の葉も水もすつと青く見え続けてるんだけど、表面はなんてことなく草が生い茂ってるのをぞろぞろと一列に並んで行くとさ、下は——どつこい間屋が御さない——水でさ、深くはないんだけど、人間なんか歩いてくと跳ね上がって来るの、すつごい素敵よ。

左右にある垣根に生えている木の枝なんか、牛車の車体なんかに入って来るのを慌ててつかまえて折ろうとする時に、すつと通り過ぎて逃げてつちやうつというのがさ、ホント、すつごいくやしいのよね。

蓮が車に押しつぶされちゃったのが、車輪が回つてくうちに近くに引つかかるついうのも、素敵よね。

資料 4

『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」 言語活動 古文作文

1年 組 番 氏名

・「〇〇月ばかりなどに××に歩く」を冒頭の一文にして、百字程度以内で、自由に作文しなさい。なお、作文は古語で行うものとするが、既習のフレーズや文法事項を応用して使っても構わない。

・ペアを作り、完成した作文を交換のうえ読み合い、よくできていると考えられるほうを選ぶ。

	さん
--	----

・ペア2組で4人組を作り、「よくできてい」た2人が発表し、どちらのものがよいか選ぶ。

	さん
--	----

・4人組を2組合体し、8人組を作り、4人組の中で選ばれた2人が作文を発表する。よくできていると考えられるほうを選ぶ。

	さん
--	----

- ・選ばれた古文作文を8人でブラッシュアップする。選ばれた人の書き換える。
- ・最初に作った自分の作品を改良してみよう。

資料5

古文作文 十二月

○一月ばかりなどに上野に歩く、いとをかし。枝や葉のうへに雪ののる様いとうつくし。雪がつもりて、日のあたりたるは、玉をまぐがごとく輝きける。寒椿からは華やかに香り立ちのぼりている。

○二月ばかりなどに家路に歩く。いまだいと寒く、道行く人、手、息であたためる、いとをかし。庭の桜いとおもしろく咲き始めたり。すこしばかり行ければ向かふより赤茶の動物来たり。あやしがりて寄りて見るにその動物こそ柴犬なりけれ。名をはきらると言ひける。いとうつくしうてあたり。

○三月ばかりなどに土手に歩く。草葉も気も湯きたる土手を歩くと、風より梅の香がにほぶ、いとをかし。なほ歩きて、かたはらにふきのとうを見付きて、幾つか摘んでみる。さてまた、如何料理すべきかと考えながら歩くも、いとをかし。

○三月ばかりなどに山里に歩く、いとをかし。車の中に桜の花ひらの入りたるを取らむとするに指の間にすりぬけたる、いとをかし。車の外に頭のみ出し、春の風をあびたるもよし。目に何か入つてくるはわろし。

◎四月ばかりなどに竹藪に歩く。節と竹斑で、短き時にいとよく音つとなつかし。未だ鶯鳴きけり。節を折り、やがて下山するに、節蒸し、塩をかけてすなはら食らふ。山の香と海の香が交わり、すすろに物悲し。ふと、米を見つけて、食はんとなれば、舌和む。

○卯月ばかりに奥州に歩く、いとをかし。奥州が町、古くからの団子などの食べ物や侍の剣、残ればおもしろし。また空澄み切つて北上川がいと強く、大きく流れ、広大なる空と川がついて見ゆる、いとをかし。金など多しをかし。行く途中、旧衣川館を通過す。衣川館と言へば源義経が約千年前の卯月に失せぬ所なり。彼が臣の戦いやう、よく考えるうちに満月昇りぬ。

○五月ばかりに雨降る町に歩く、いとをかし。猫も鳥も少なく、五月雨の響きわたりたる、いとをかし。草木や道のいと艶めきたるに、下は波立つ水の、深くはあらねど、歩むに、足に浸む、いと乗しげなり。

○六月ばかりなどに浜辺に歩く。日の光、水にうつり、輝きまいとをかし。子どもらの乗しげに遊ぶ声、聞こゆれば夏来たること感じ、いと楽しく覚ゆ。また、昔見ゆれてあはれなり。

○七月ばかりなどに山に歩く、いとわろし。ことさらに曇き日に山に登りたるは、いとみづげなり。とまれかうまれ、山の散策地図、疾く破りてむ。

◎八月ばかりなどに廊下に歩く、おろかなり。曇き日、廊下を歩きければ、中央に黒きものありけり。あやしがりて、寄りて見るに、つきふなり。よく見れば、一寸なるつきぶり、瞳がつぶらなり。

○長月ばかりなどに我が庭に歩く。曇き過ぎ、やうやう涼しくなりゆく外、蚊などの煩わしき虫少なくなりける、いとこころよし。上、ふと仰き見れば台風過ぎ、空蒼く広がりたるに雨染みて、えならざりける地の空色映りて、いと青く見えわたりたる、いとをかし。

○九月ばかりなどに闇夜に歩く、いとをかし。風はせうせう寒く、上はいと大きな月がきらめき、足下は闇深く、遠方ではかすかなるこおろぎの鳴き声が聞こゆ。夏暮れてのお秋になり。杪夏を感ず。孤独の淋しさもまたあはれなり。

○十月ばかりなどにお茶大樽内に歩く、いとおもしろし。黄金に色づきし葉、数多あり。金木犀の花いと甘く薫りにけり。上を見れば銀杏の葉、すこし風に吹かれて散りにける。小径を長々と縦さまに行こうとなれば、沓の下に押しひしがりたりけるものあり。見れば、橙色の実あり。美味なれど沓の下で匂う様はわろし。

○十一月ばかりなどに田舎道に歩く。朝日の昇るを見て、日の光、全面に浴びるはいと心地ゆきけれ。またはきつる息が白くなりて光がぼやけるもいとをかし。畑の上を歩きてかがやきたる糞柱を踏みたるに糞柱の音しつるはいとをかし。踏みけるも言せざるはいと口惜し。

○十一月ばかりに紅葉の中を歩く。赤、黄、鮮やかなる葉、風に吹かれて舞い散る。その中の一枚、池に落ちて波紋作り、それ繰り返すのち、池いと赤く異様になる。その様、いと美しければ、見はれる。

◎十二月ばかりなどに表参道を歩く。いと美しき色とりどりの行灯と数多の妹背見えわたりたるに、我はただ一人、心凄し。かしかむ手を温めてくれる人はなし。

○十二月ばかりなどに雪原に歩く、いとあやし。白き深雪の草原を覆う様は一度も筆入れぬ半紙のごとし。そこに足を踏み入れれば己の足の型がつくこそをかしけれ。少し手に取りてよく見ければ光を映して輝きけるので思はず口に感嘆出けり。

資料 6

古文作文 蘭組 「〇月ばかりなどに××に歩く」

- 1 八月ばかりなどに京に歩く、いと暑し。されど、夏の京にも涼しさを感じられる所あり。秋には薄げに紅葉するもみじの葉も夏は青々としたり。鮮やかな色をした平等院と、後ろに見ゆる対照的な色のもみじの葉の景色は八月の京ならではの景色なり。
- 2 八月ばかりなどに廊下に歩く、おろかなり。暑き日、廊下を歩きければ、中央に黒きものありけり。あやしかりて、寄りて見るに、きふりなり。よく見れば、一寸なるきふり、腫がつぶらなり。
- 3 師走ばかりに山里に歩く、いとをかし。草葉の雪を破くを見れば、冬の訪来を感ず。白き地を踏み跡を残す音や、快き跡を並べ憎き人の顔を描く。心のままに踏み荒して、笑みを浮かべし。あはれなり。いと寒し。帰りに雪見大福食はん。
- 4 十二月ばかりなどのあけぼのに学校に歩く、いとあし。空気が空もいと寒く、ただ息だけが白く広がらる。せつかく憂き思ひし布団よりいでしに、外にいづとも少し進めば精一杯なり。げに、寒き冬ほど悪しきものはあらず。ただ、澄みし空気を通して見る朝日はかりは少し恋しき。
- 5 十二月ばかりなどに学校に歩く、いとたるし。学生も師もいとけだるく見えわたりたるに、冷気たまりたるを、長々と授業受けにければ、師のえならざりける顔の、青白くありたるが、学生などの学びに、眠気をもよおしたる、いとつらし。左右にある窓よりさし入りたるきんなんの香りが眠気まじりにいとよろし。木枯らしに吹かれしものが他所人の頭に落ちるを見たるはいとをかし。

古文作文 菊組 「〇月ばかりなどに××に歩く」

- 1 三月ばかりなどに畑に歩く、いとをかし。春立つて雪は雨に姿はれり。水玉の降りて、傘にあたる音を聞く。寒きに身を縮め、上を見れば、鳥のうららかに飛びたる、いとをかし。下を見れば、草の芽のすこし出でたる、うつくし。命、春めくを待つ気色なり。
- 2 四月ばかりなどに竹藪に歩く。筍と竹斑で、短き時にいとよく音つとなつかし。未だ鶯鳴きけり。節を狩り、やがて下山するに、節蒸し、塩をかけてすなはら食らふ。山の香と海の香が交わり、すずろに物悲し。ふと米を見つけて、食はんとすれば、舌和む。
- 3 四月ばかりなどに目黒川に歩く、いとをかし。川の青、人の衣服だに桃色に色づきたる、いとをかし。桜咲けどもまた頬を撫つる風は寒し。頬を撫つる風やさしければ、花びら、いとをかし。
- 4 六月ばかりなどに山の小道に歩く、いとをかし。空を見上ぐと木の葉の間より日差しを心地、思はず目を細む。耳を澄ますと、蝉の鳴き声や風に木の葉の揺れたる音のきこゆれど、いとをかし。目の前の景色がさほどうつろはぬは徒然なれど、あるに視界開け、日の光が全身に降り注がれ感もをかし。
- 5 十二月ばかりなどに夜道に歩く。マスクはあれど、酉の刻から亥の刻はかりの外にはほひ、鼻に寒き気をまとはし、枯れ葉の薫りを我の元に運びこむ、いとをかし。年ごろ、マスクありて、口惜し。車に乗りて窓を開けたりするもをかし。

古文作文 梅組 「〇月ばかりなどにXXに歩く、」

1 一月ばかりなどに冬の小道に歩く、いとをかし。

足元を見れば、犬の小さな足形の向かふへ続きたり。いとらうたし。暗き里まき夜に月の光が雪に届けば、辺り、銀天下となりけり。いとつづくし。

2 二月ばかりなどに家路に歩く。いまだいと寒く、道行く人、手を息であたためたる、いとをかし。公園の桜いとおもしろく咲き始めたり。すこしばかり行きければ前方より赤茶の動物来たり。あやしがりて寄りて見るにその動物、柴犬なり。名をばきららと言ひける。いとつづくしつてむたり。

3 十月ばかりなどに栗林に歩く。栗といふもの、いがありて痛し。されはそのいがを踏まぬやうに心置く。さても、栗はいと甘し。さながらもよし。まだシヤムにするもよし。かくばかりすぐなる栗に、いかでかどげあらむ。

4 十一月ばかりなどに田舎道に歩く。朝日の昇るを見て、日の光を全面に浴びるはいと心地ゆきけれ。またはきつる息が白くなりて光がばやけるもいとをかし。畑の上を歩きてかがやきたる竈柱を踏みたるに竈柱の音がしてくるはいとをかし。踏みけるも音のしなはいと口惜し。

5 十二月ばかりなどに表参道を歩く。いと美しき色とりどりの行灯よせがきーしんごと数多あまたの株昔あかぶ見えわたりたるに、我はただ一人、心裏し。かしかむ手を温めてくれる人はなし。

年度当初、生徒に配布した資料を参考資料とします。下部に公開研究会に当たってのコメントを付してあります。

1年 古文 目標と予定

- 目 標： 1 古文の読解力をつける
 2 古文の語彙力・文法力（用言・助動詞）をつける
 3 作品の時代背景を理解する
 4 鑑賞力と感性を高める

評 価：定期テスト・小テスト・提出物・授業態度

予 定：入門—説話 「検非違使忠明」「絵仏師良秀」「大江山の歌」
 『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」「ある人、弓射ることを習ふに」
 「九月二十日のころ」

*** 期末考査**

『伊勢物語』「東下り」（実習生）
 『土佐日記』「旅立ち」「帰京」（実習生）
 『枕草子』「ありがたきもの」
 「五月ばかりなどに山里にありく」

*** 中間考査**

『徒然草』「奥山に猫またといふものありて」「花は盛りに」
 『平家物語』「木曾の最期」

*** 期末考査**

『万葉集』『古今集』『新古今和歌集』
 『大鏡』「花山院の出家」「三才の舟」
 『伊勢物語』「小野の雪」「狩りの使ひ」

*** 期末考査**

○順序が入れ替わったり、他の教材が入ったりすることもあります。教科書にないものはプリントを配布します。

- ・授業の際は「古典文法」「古語辞典」は必ず、「国語便覧」は必要に応じて持参のこと。
 「古典文法」「古語辞典」は授業中、いつ参考にしてもよい。
- ・文法は「用言の活用」「助動詞」「助詞」「敬語」の順番に学習します。
- ・進度が早いので準備を十分行って授業に臨むこと。

古文の学習方法

- 1) 原文を書き写すのも力になります。
- 2) 授業でやり方は教えますが、品詞分解を行うと文法の力がつきます。
- 3) 現代語訳は辞書を引ながら自分でやると力がつきます。
- 4) 授業中は板書以外も（口頭での説明も）メモしておくとうい。
- 5) ノートは上の1)～4)が一覧できるようなノート作りが大切です。

間に教育実習生の授業があったが、説話・『徒然草』前半・『枕草子』を入門教材扱いとしています。今回の古文作文は既習の古文単語・文法事項・言い回しなどを取り入れるという意味で入門期のまとめと捉えています。ほかの生徒がそれらを用いて作文をしているものに触れることによっても、既習の知識が確認されると考えています。このようなことから入門期のまとめとしてこの教材を位置づけています。なお、他の入門期の教材についても言語活動を行っており、それについては本校HP掲載の紀要（お茶の水女子大学附属高等学校＞研究＞紀要＞第66号）をご覧ください。

(<http://www.lib.ocha.ac.jp/oab/33kenkyukiyofk03/listOfIssue.html>)

なお、研究協議にご参加になれない方でご質問等ありましたら、メールをご送付ください。

hatakeyama.takashi@ocha.ac.jp